

森
鷗
外

舞
姬



舞

姬

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓つくろのほとりはい
 と静にて、熾熱燈しねつとうの光の晴れがましきも徒いたづらなり。今宵こよひ
 は夜毎にここに集ひ来る骨牌仲間カルタも「ホテル」に宿りて、
 舟に残れるは余一人のみなれば。五年前いつとせまへの事なりしが、
 平生ひごろの望足りて、洋行の官命かうむを蒙り、このセイゴンの
 港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つと
 して新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日
 ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、
 世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、

釋をさなき思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常よのつねの動植金
 石、さては風俗なご杯をさへ珍しげにしるししを、心ある人
 はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記にきもの
 せむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸ドイツにて
 物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象
 をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。
 げに東ひんがしに還かへる今の我は、西に航せし昔の我ならず、
 学問こそ猶なほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうき
 ふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、
 われとわが心さへ変り易やすきをも悟り得たり。きのふの是

はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼あ、ブリンヂイシイの港いを出でてより、早や二十日はつかあまりを経ぬ。世の常ならば生面せいめんの客にさへ交まじはりを結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙びようにことよせて房へやの裡うちにのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭かしらのみ悩ましたればなり。此この恨は初め一抹いちまつの雲の如く我心を掠めて、瑞西スイスの山色をも見せず、伊太利イタリアの古蹟こせきにも心を留めさせず、中頃は世を厭いと

ひ、身をはかなみて、はらわた腸 日ごとに九廻すともいふべき
 惨痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点
 の翳かげとのみなりたれど、文読ふみむごとに、物見るごとに、
 鏡に映る影、声に応ずる響の如く、限なき懐旧の情を喚よ
 び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか
 此恨を銷しょうせむ。若もし外の恨なりせば、詩に詠じ歌によ
 める後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみは余り
 に深く我心に彫ゑりつけられたればさはあらじと思へど、
 今宵はあたりに人も無し、房奴ぼうどの来て電気線の鍵かぎを振ひねる
 には猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴つづりて

見む。

余は幼き比ころより厳しき庭の訓をしえを受けし甲斐かひに、父をば早く喪うしなひつれど、学問の荒すさみ衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備よびごう鬻とよたろうに通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎とよたろうといふ名はいつも一級の首はじめにしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某なにがしししょう省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三とせばかり、

官長の覚え殊ことなりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興おこさむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を躪こえし母に別るるをもさまで悲しとは思はず、遙々はるばると家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模糊もこたる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とをたちま持ちて、忽ちこの欧羅巴ヨオロッパの新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢しきたくぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下ぼだいじゆかと訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪の如きウンテル、

デン、リンデンに来て両辺なる石だたみの人道を行く
 隊々の士女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだ維廉キルヘルム
 一世の街に臨める窓に倚り玉ふ頃なりければ、様々の色
 に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女の巴里パリまね
 びの粧よそほひしたる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道
 の土瀝青チヤンの上を音もせで走るいろいろの馬車、雲に聳ゆ
 る楼阁ろうかくの少しとぎれたる処ところには、晴れたる空に夕立の
 音を聞かせて漲り落つる噴井ふきゐの水、遠く望めばブラン
 デンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、
 半天に浮び出でたる凱旋塔がいせんとうの神女の像、この許多あまたの景物

目^{もくしやう}睫^{まゆ}の間に聚^{あつ}まりたれば、始めてここに来しものの応^{おう}接^{いさま}に違^{ちが}なきも宜^{うべ}なり。されど我胸^{わがむね}には縦^{たど}ひいかなる境^{きょう}に遊^{あそ}びても、あだなる美觀^{みくわん}に心をば動^{うご}さじの誓^{ちか}ありて、つねに我を襲^{せう}ふ外物^{がいぶつ}を遮^{さへぎ}り留^{とど}めたりき。

余^{すずなは}が鈴索^{すずなは}を引き鳴^ならして謁^{えつ}を通^とじ、おほやけの紹介状^{せうかいじょう}を出^だだして東来^{とうらい}の意^いを告^つげし普魯西^{プロシヤ}の官員^{くわんいん}は、皆快^{みな}く余^{あつ}を迎^{むか}へ、公使館^{こうしきん}よりの手^てつづきだに事^{こと}なく済^すみたらまし
かば、何事^{なにごと}にもあれ、教^{しゆ}へもし伝^{つた}へもせむと約^{やく}しき。喜^{よろこ}
ばしきは、わが故里^{ふるさと}にて、独逸^{とくいつ}、仏蘭西^{フランクス}の語^{ことば}を学^{まな}びしこ
となり。彼等^{かれら}は始めて余^{あつ}を見^みしとき、いづくにていつの

間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事の暇いとまあるごとに、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊ぼまつに記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第はかどに捗り行けば、急ぐことをば報告書いくまきに作りて送り、さらぬをば写し留めて、つひには幾卷いくまきをかなしけむ。大学のかたにては、釋をさなき心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵こうえんに列つらなることにおも

ひ定めて、謝金を収め、往ゆきて聴きつ。

かくて三年みとせばかりは夢の如くにたちしが、時きた来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒ほむるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ほげますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥おだやかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの

我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜よろしからず、また善よく法典を諳そらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余は私ひそかに思ふやう、我母は余を活いきたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣さ々たる問題にも、極めて丁寧ていねいにいらへしつる余が、この頃より官長に寄する書には連しきりに法制の細目に拘かかづらふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事

は破竹の如くなるべしなどと広言しつ。又大学にては法
 科の講筵を余所よそにして、歴史文学に心を寄せ、漸やうやく蔗しょ
 を嚼かむ境に入りぬ。

官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らんと
 したりけめ。独立の思想を懐いだきて、人なみならぬ面おももち
 したる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位な
 りけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆くつがへす
 に足らざりけんを、日比伯林ひごろベルリンの留学生の中にて、或る勢
 力ある一群ひとむれと余との間に、面白からぬ関係ありて、彼人々
 は余を猜疑さいぎし、又遂に余を讒誣ざんぶするに至りぬ。されどこ

れとても其故そのゆゑなくてやは。

彼人々は余が俱ともに麦酒ビールの杯さかづきをも挙げず、球突キユウきの棒をも取らぬを、かたくななる心と慾よくを制する力とに歸して、且かつは嘲あざけり且かつは嫉ねたみたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎いかでか人に知らるべき。わが心はかの合歡ねむといふ木の葉に似て、物触さわれば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学まなびの道をたどりしも、仕つかへの道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能よくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人

をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯だひとすぢ一条
 にたどりしのみ。余所よそに心の乱れざりしは、外物を棄て
 て顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯外物に恐れて自ら
 わが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が
 有為の人物なることを疑はず、又我心の能く耐へんこと
 をも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離る
 るまでは、天晴豪傑あっぱれと思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾しゅきん
 を濡らしつるを我れ乍ながら怪しと思ひしが、これぞなかな
 かに我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、
 又早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけ

ん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面おもてを塗りて、赫然かくぜんたる色の衣を纏まとひ、珈琲店

に坐して客を延ひく女を見ては、往ゆきてこれに就かん勇氣

なく、高き帽を戴いただき、眼鏡に鼻を挟はさませて、普魯西に

ては貴族めきたる鼻音にて物言ふ「レエベマン」を見て

は、往きてこれと遊ばん勇氣なし。此等の勇氣なければ、

彼活潑かつぱつなる同郷の人々と交らんやうもなし。この交際の

疎うときがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみなら

で、又余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は猷苑を漫歩して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余は彼の燈火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は窰住まひの鍛冶

が家に通じたる貸家などに向ひて、凹字おうじの形に引籠ひっこみて立てられたる、此三百年前の遺跡を望む毎ごとに、心の恍惚こうこつとなりて暫しばし佇みしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖とぎしたる寺門の扉に倚よりて、声を呑のみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被かぶりし巾きれを洩もれたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢あかつき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問まっげひたげに愁うれひを含める日の、半ば露を宿せる長き睫毛まっげに掩おほ

はれたるは、何故なにゆゑに一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料はからぬ深き歎なげきに遭ひて、前後を顧みる違いとまなく、ここに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫れんびんの情に打ち勝たれて、余は覚えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫累けいるいなき外人よそびとは、却かへりて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大胆なるに呆あきれたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色あらに形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼

の如く酷くはあらず。又た我母の如く。「暫し涸れたる
 涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならんを。母はわ
 が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。

明日は葬らでは愜はぬに、家に一銭の貯だになし。」

跡は歔歔の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫
 ふ項うなじにのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人
 に聞かせ玉ひそ。ここは往来なるに。」彼は物語するう
 ちに、覚えぬ我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、

又始てわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

人の見るが厭いとはしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜くぐるべき程の戸あり。少女は鏽さびたる針金の先きを振ねぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳しはが枯れたる老媪おうなの声して、「誰たぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあららかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪あしき相にはあらねど、貧苦の痕あとを額ぬかに印せし面の老媪にて、古き獣綿の衣を着、汚れたる上靴を穿はきたり。エリスの余に会

釈して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈ラムプの光に透すかして戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆うるしもて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老媪いんぎんは慇懃いんぎんにおのが無礼の振舞せしを詫わびて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨くりやにて、右手めての低き窓に、真白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手ゆんでには粗末に積上げたる煉瓦れんがの竈かまどあり。正面の一室

の戸は半ば開きたるが、内には白布しらぬのを掩へる臥床ふしどあり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処は所謂いはゆる「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁はりを、紙にて張りたる下の、立たば頭の支つかふべき処に臥床あり。中央なる机には美しき氈かもを掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列ならべ、陶瓶とうへいにはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍かたはらに少女は羞はぢを帯びて立てり。

彼は優すぐれて美なり。乳ちの如き色の顔は燈火ともしびに映じて

微うすくれなゐ紅を潮さしたり。手足の織かぼそく裊たをやかなるは、貧家の女をみな
 に似ず。老媪の室へやを出でし跡にて、少女は少し訛なまりたる
 言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をここまで導きし心なさを。
 君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日
 に迫るは父の葬はふり、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君
 は彼を知らでやおはさん。彼は「エクトリア」座の座頭ざがしら
 なり。彼が抱かかへとなりしより、早や二年ふたとせなれば、事なく
 我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手
 なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き
 給金を拆さきて還かへし参らせん。縦令我身よしやは食くらはずとも。そ

れもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否いなとはいはせぬ媚態びたいあり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌しのぎ玉へ。質屋の使のモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別わかれのために出いだし

たる手を唇にあてたるが、はらはらと落つる熱き涙なんだを
 我手の背そびらに濺そそぎつ。

嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我僑
 居に來し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレ
 ルを左にして、終日兀坐ひねもすこつぎする我読書の窓下に、一輪の名
 花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸まじはり
 く繁くなりもて行きて、同郷人にさへ知られぬれば、彼
 等は速そくりよう了にも、余を以て色もつを舞姫の群ぎよに漁するものと
 したり。われ等二人の間にはまだ痴騷ちがいなる歡樂のみ存じ
 たりしを。

その名を斥ささんははばかり 憚はばかり あれど、同郷人の中に事を好む
 人ありて、余が屢しばしば芝居に出入して、女優と交るといふ
 ことを、官長の許もとに報じつ。さらぬだに余が頗すこぶる学問
 の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使
 館に伝へて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの
 命を伝ふる時余に謂ひしは、御身おんみ若し即時に郷に歸らば、
 路用を給すべけれど、若し猶ここに在らんには、公の助
 をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を
 請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我生涯もつとにて尤も悲
 痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通は殆ど

同時にいだししものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某なにがしが、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じた書ふみなりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運はこびを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時までは余所目よそめに見るより清白なりき。彼は父の貧きがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつのに応じて、この恥づかしき業わざを教へられ、「クルズス」果てて後、「キクトリア」座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが当世の奴隸といひし如く、はか

なきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋がれ、昼の温習、夜の舞台と緊きびしく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧よそほひ、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝なれば、親腹からを養ふものはその辛苦奈何いかにぞや。されば彼等の仲間にて、賤いやしき限りなる業に墮おちぬは稀まれなりとぞいふなる。エリスがこれをのが追れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護さすとに依りてなり。彼は幼き時より物読むことをば流石さすに好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジュ」と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識ある頃より、余が借

しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛なまりをも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤あやまりじ字少なくなりぬ。かかれば余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事かかはに関りしを包み隠しぬれど、彼は余に向ひて母にはこれを秘め玉へと云ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

嗚呼、くはし委くはしくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛めづる心の俄にはかに強くなりて、遂に離れ難き中となりしは

此折なりき。我一身の大事は前に横りて、洵まことに危急
 存亡ときの秋なるに、この行おこなひありしをあやしみ、又た誹そしる
 人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相
 見し時よりあさくはあらぬに、いま我数奇さつきを憐あはれみ、又
 別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢びんの毛の解けてかかり
 たる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺
 激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚こうこつの間にこ
 こに及びしを奈何いかにせむ。

公使に約せし日も近づき、我命めいはせまりぬ。このまま
 にて郷にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮

ぶ瀬あらし。さればとて留まらんには、学資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相沢謙吉なり。

彼は東京に在りて、既に天方伯あまがたはくの秘書官たりしが、余が

免官の官報に出でしを見て、某なにがし新聞紙の編輯へんしゅうちよう長に説

きて、余を社の通信員となし、伯林ベルリンに留まりて政治学芸

の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家すみかをもうつし、

午餐ひるげに往く食たべものみせ店をもかへたらんには、微かすかなる暮しは

立つべし。兎角とかう思案する程に、心の誠を顕あらはして、助の

綱をわれに投げ掛けしはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼等親子の家に寄寓きぐうすることとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合せて、憂きがなかにも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈カッフエエ啡果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所おもむに赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でて彼此かれこれと材料を集む。この截きり開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人わかうど、多くもあらぬ金を人に借して己おのれは遊び暮す老人、取引所ひまの業の隙を

儉ぬすみて足を休むる商人あきうどなどと臂ひぢを並べ、冷ひややかなる石卓いしづくゑ
 の上にて、忙いそがはしげに筆を走らせ、小をんなが持て来
 る一盞ひとつきの咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長
 き板はぎれに挿はさみたるを、幾種いくいろとなく掛つらねたるかたへ
 の壁に、いく度となく往来する日本人を、知らぬ人は何
 とか見けん。又一時近くなるほどに、温習とむに往きたる日
 には返り路ぢによぎりて、余と俱ともに店を立出づるこの常な
 らず軽き、掌上の舞をもなしえつべき少女を、怪み見送
 る人もありしなるべし。

我学問は荒すさみぬ。屋根裏の一燈かすか微かすかに燃えて、エリス

が劇場よりかへりて、いす 椅に寄りて縫ものなどする側の机
 にて、余は新聞の原稿を書けり。昔しの法令条目の枯葉
 を紙上に搔寄せしとは殊にて、今は活潑々たる政界の運
 動、文学美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあ
 はせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりは寧むしろ ハイネを
 学びて思を構へ、様々の文ふみを作りし中にも、引続きて
 維廉キルヘルム 一世と仏得力三世との崩殂ほうそありて、新帝の即位、
 ビスマルク侯の進退如何いかななどの事に就ては、故らことごとに詳つまびら
 かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも
 忙はしくして、多くもあらぬ蔵書をひもと繙き、旧業をたづ

ぬることも難く、大学の籍はまだ刪けづられねど、謝金を収むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵けいぎんだに往きて聴くことは稀なりき。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡およそ民間学の流布したることは、歐洲諸国の間にて独逸に若しくはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論には頗る高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、曾かつて大学に繁かく通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、讀みては又讀み、写しては又写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自おのづから綜括そうかつ

的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに。

明治廿一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ沙すなをも蒔まけ、鍤すきをも揮ふるへ、クロステル街のあたりは凸凹とつおうかんか坎坷の処は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝あしたに戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室へやを温め、竈かまどに火を焚たきつけても、壁の石を徹とほし、衣の綿わたを穿うがつ北歐羅巴ヨオロッパの寒さは、なかなか堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞台にて卒倒たすしつとて、人に扶たすけられ

て帰り来しが、それより心地あしとて休み、もの食ふごとくに吐くを、つわり悪阻といふものならんと始めて心づきしは母なりき。嗚呼あゝあゝ、さらぬだにおぼつか覚束なきは我身の行末なるに、若しまこと真なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に臥ふすほどにはあらねど、ちき小き鉄炉の畔ほとりに椅子さし寄せて言葉寡すくなし。この時戸口に人の声して、程なく庖ほうちゆう厨ちゆうにありしエリスが母は、郵便の書状を持って来て余にわたしつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西プロシヤのものにて、消印には伯林ベルリンとあり。訝いぶかり

つつも披ひらきて読めば、とみの事にて預あらかじめ知らするに由
 なかりしが、昨夜よべここに着せられし天方大臣あまがたに附きてわ
 れも来たり。伯なんぢの汝を見まほしとのたまふに疾とく来よ。
 汝が名誉を恢復かいふくするも此時にあるべきぞ。心のみ急がれ
 て用事をのみいひ遣やるとなり。読み畢をはりて茫然たる面も
 ちを見て、エリス云ふ。「故郷よりの文なりや。悪あししき便たより
 にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思
 ひしならん。「否、心にな掛かけそ。おん身も名を知る相
 沢が、大臣と俱ともにここに来てわれを呼ぶなり。急ぐとい
 へば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出し遣る母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢も極めて白きを撰び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロツク」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が為めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰れも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何故にかく不興なる面もちを見せ玉ふか。われも諸共に行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豊太郎の君とは見えぬ。」又た少し考へて。「縦令富貴になり玉ふ

日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宣のたまふ如くならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは絶ちしより幾年いくとせをか経ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」

エリスが母の呼びし一等「ドロシユケ」は、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套がいたうを背に被おほひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼たかどのを下りつ。彼は凍れる窓を明け、乱れし髪を朔風さくふうに吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホーフ」の入口なり。門者かどもりに秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階きざはしを登り、中央の柱に「プリユツシユ」を被へる「ゾファ」を据すゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばここに脱ぎ、廊わたどのをつたひて室の前まで行きしが、余は少し踟蹰ちちゆうしたり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、けふは怎いかなる面もちして出迎ふらん。室に入りて相對して見れば、形こそ旧もとに比ぶれば肥えて逞たくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我失行しっこうをもさまで意に介せざりきと

見ゆ。別後の情を細叙するにも違ちがあらず、引かれて大臣に謁し、委托いたくせられしは独逸語にて記せる文書もんじよの急を要するを翻譯ほんやくせよとの事なり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相沢は跡より来て余と午餐ひるげを共にせんといひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概おほむね平滑なりしに、轆軻かんかさつき数奇なるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、かれは屢と驚きしが、なかなか余を譴せめんとはせず、却かへ

りて他の凡庸なる諸生輩を罵りののしき。されど物語の畢をはりしとき、彼は色を正して諫いさむるやう、この一段のことは素もと生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活なりはひをなすべき。今は天方伯も唯だ独逸語を利用せんの心のみになり。おのれも亦また伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強しひて其成心そのを動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者きよくひなりなど思はれんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦すすむるは先づ其能を示すに若しかず。これを示

して伯の信用を求めよ。又彼少女との関係は、縦令彼に誠ありとも、縦令情交は深くなりぬとも、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵かぢを失ひしふな人が、遥はるかなる山を望む如きは、相沢が余に示したる前途の方鍼ほうしんなり。されどこの山は猶なほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果して往きつきぬとも、我中心に満足を与へんも定かならず。貧きが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めんよしなかりしが、姑しよらく友の

言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に対して否とはえ対こたへぬが常なり。

別れて出づれば風面おもてを撲うてり。二重の玻璃窓ふたえ ガラスを緊きびしく鎖とぎして、大いなる陶炉に火を焚たきたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄とほき外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚はだへあはだ栗立つと共に、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。「カイゼルホオフ」へ通ふことはこれより漸く繁くなりもて行く程に、初めは伯の

言葉も用事のみなりしが、後には近比ちかごろ故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて、「余は明旦あす、魯西亞ロシアに向ひて出発すべし。随したがひて来べきか、」と問ふ。余は数日間、かの公務に違なき相沢を見ざりしかば、此問このは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我恥を表はさん。此答はいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟とっさの間かん、その答

の範圍を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、その為し難きに心づきても、強て當時の心虚なりしを掩おほひ隠し、耐忍してこれを実行すると屢々なり。

此日は翻譯の代しろに、旅費さへ添へて賜はりしを持って歸りて、翻譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り来んまでの費つひえをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性さがなりしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭ざがしらよりは休むことのみあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかりな

るに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我心を厚く信じたらば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。

身に合せて借りたる黒き礼服、新に買求めたるゴタ板ばんの魯廷ろていの貴族譜、二三種の辞書などを、小「カバン」に入れたるのみ。流石に心細きことのみ多きこの程なれば、出で行く跡に残らんも物憂うしろめたかるべく、又停車場にて涙こぼしなどしたらんには影うしろめた護かるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出いだしやりつ。余は旅

装整へて戸を鎖し、鍵かぎをば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行につきては、何事をか叙すべき。わが舌人ぜっじんたる任務つとめは忽地たちまちに余を拉らっし去りて、青雲の上に墮おとしたり。余が大臣の一行に随ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を围绕いにようせしは、巴里パリ絶頂の驕きようしや奢しやを、氷雪の裡うちに移したる王城の粧そうしよく飾ことさ、故らに黄蠟おうろうの燭しよくを幾つ共なく点ともしたるに、幾星の勲章、幾枝の「エポレット」が映射する光、彫鏤ちようろうの工たくみを尽したる「カミン」の火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇ひらめの閃ひらめきなどにて、この間仏蘭西語を最も円

滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書をふみ寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて燈火ともしびに向はん事の心憂さに、知る人の許もとにて夜に入るまでもの語りし、疲るるを待ちて家に還り、直ちにいねつ。次の朝あしためざ目醒めし時は、猶独り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かかる思ひをば、生計たつきに苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書の略あらましなり。

又程経てのふみは頗^{すこぶ}る思ひせまりて書きたる如くな
 りき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心
 の深き底^{そこひ}をば今ぞ知りぬる。君は故里に頼もしき族^{やから}な
 しとのたまへば、此地に善き世渡のたつきあらば、留り
 玉はぬことやはある。又我愛もて繋^{つな}ぎ留めでは止^やまじ。
 それも愜^{かな}はで東に還り玉はんとならば、親と共に往かん
 は易けれど、か程に多き路用を何^{いづく}処よりか得ん。怎^{いか}なる
 業をなしても此地に留りて、君が世に出で玉はん日をこ
 そ待ためと常には思ひしが、暫^{しば}しの旅とて立出で玉ひし
 より此^は二十^つ日^かばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。

袂たもとを分つはただ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷まよひなりけり。我身の常ならぬが漸くにしるくなれる、それさへあるに、縦よしや令いかなることありとも、我をば努ゆめな棄て玉ひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東に往かん日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉はば、我路用の金は兎も角もなりなん。今は只管ひたすら君がベルリンにかへり玉はん日を待つのみ。

嗚呼、余は此書を見て始めて我地位を明視し得たり。

恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、また我身に係かかはらぬ他人ひとの事につきても、決断ありと自ら心に誇りしが、此決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照さんとするときには、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが尽したる職分をのみ見き。余はこれに未来の望を繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて想おもひいた到いたらざりき。されど今ここに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟か。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の禽とりの如くなりしが、

今は稍ややとこれを得たるかと思はるるに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に歸りて後も俱ともにかくてあらば云々しかじかといひしは、大臣のかく宣のたまひしを、友ながらも公事なれば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が輕卒にも彼に向ひてエリスとの關係を絶たんといひしを、早く大臣に告げやしけん。

嗚呼、独逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。曩さきにこれあやを繰あやつり

しは、我^{なにがし}某^{しょう}省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、
 天方伯の手中に在り。余が大^あ臣の一行と俱にベルリンに
 歸りしは、恰^あも是^かれ新年の旦^こなりき。停車場に別を告
 げて、我家をさして車を駆りつ。ここにては今も除夜に
 眠らず、元旦に眠るが習なれば、万戸寂^{せき}然^{ぜん}たり。寒さは
 強く、路上の雪は稜^{りょう}角^{かく}ある氷片となりて、晴れたる日
 に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲りて、
 家の入口に駐^{とど}まりぬ。この時窓を開く音せしが、車より
 は見えず。馭^{ぎよ}丁^{てい}に「カバン」持たせて梯^{はし}を登らんとす
 る程に、エリスの梯を駈^かけ下るに逢ひぬ。彼が一声叫び

て我頸うなじを抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭ひげの内にて云ひしが聞えず。

「善くぞ歸り来玉ひし。歸り来玉はずば我命は絶えなんを。」

我心はこの時まで定まらず、故郷を憶おもふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を圧せんとせしが、唯だ此一刹那せつな、低徊踟蹰ていかいちちゆうの思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭かしらは我肩に倚よりて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼らどの如く叫びし馭丁は、

いち早く登りて梯の上^に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁^{ねぎら}を勞^{ねぎら}ひ玉へと銀貨をわたして、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥^{いちべつ}して余は驚きぬ、机の上には白き木綿^{もめん}、白き「レエス」などを堆^{うづたか}く積み上げたれば。エリスは打笑^{うちゑ}みつつこれを指^{ゆびさ}して、「何とか見玉ふ、この心がまへを。」といひつつ一つの木綿ぎれを取上ぐるを見れば襠^{むつき}褌^きなりき。「わが心の楽しさを思ひ玉へ。産れん子は君に似て黒き瞳子^{ひとみ}をや持ちたらん。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳子なり。産れたらん日

には君が正しき心にて、よもあだし名をばなのらせ玉は
 じ。」彼は頭を垂れたり。「おさな釋しと笑ひ玉はんが、寺に
 入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる日には涙
 満ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとして敢^{あへ}
 て訪^{とぶ}らはず、家にのみ籠^{こも}り居しが、或る日の夕暮使して
 招かれぬ。往きて見れば待遇殊^{こと}にめでたく、魯西亞行の
 労を問ひ慰めて後、われと共に^{ひんがし}東にかへる心なきか、
 君が学問こそわが測り知る所ならね、語学のみにて世の
 用には足りなむ、滞留の余りに久しければ、様々の係累

もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて
おちゐ落居たりと宣ふ。其けしきいな気色辞むべくもあらず。あなやと思
ひしが、流石に相沢の言を偽なりともいひ難きに、若し
この手にしもすが縋らずば、本国をも失ひ、名譽を挽ひきかへ
さん道をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に
葬られんかと思ふ念、心頭を衝ついて起れり。嗚呼、何等
の特操なき心ぞ、「承はべはり侍り」と応へたるは。

黒がねの額ぬかはありとも、歸りてエリスに何とかいはん。
「ホテル」を出でしときの我心の錯乱は、譬たとへんに物な
かりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、

往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのき
 つ。暫くしてふとあたりを見れば、獣苑の傍に出で
 たり。倒るる如くに路の辺の榻に倚りて、灼くが如く熱
 し、椎にて打たるる如く響く頭を榻背に持たせ、死した
 る如きさまにて幾時をか過しけん。劇しき寒さ骨に徹す
 と覚えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の底、
 外套の肩には一寸許も積りたりき。

最早十一時をや過ぎけん、モハビツト、カルル街通ひ
 の鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門
 の畔の瓦斯燈は寂しき光を放ちたり。立ち上らんとす

るに足の凍えたれば、両手にて擦りて、漸やく歩み得る程にはなりぬ。

足の運びの抄はかどらねば、クロステル街まで来しときは、半夜をや過ぎたりけん。ここ迄まで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶なほ人の出入盛りにて賑にぎはしかりしならめど、ふつに覚えぬ。我脳中には唯と我は免ゆるすべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝いねずと覚おぼしく、惘けいぜん然たる一星の火、暗き空にすかせば、明かに見ゆるが、

降りしきる鷺さぎの如き雪片に、乍たちまち掩はれ、乍たちまちまたあらは顯れて、風もてあそに弄もてあそばるるに似たり。戸口に入りしより疲を覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這はふ如くに梯を登りつ。庖ほうちゆう厨を過ぎ、室へやの戸を開きて入りしに、机に倚りて襖むつぎ襦縫ひたりしエリスは振り返へりて、「あ」と叫びぬ。「いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜うべなりけり、蒼然そうぜんとして死人に等しき我面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪は蓬おどろと乱れて、幾度か道にて跌つまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汗よじれ、処々は裂けたれば。

余は答へんとすれど声出でず、膝ひざの頻しきりに戦をのかかれて立つに堪へねば、椅子を握つかまんとせしまでは覚えしが、その儘ままに地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは数週すしゅうの後なりき。熱劇しくて譖語うはごとのみ言ひしを、エリスが慝ねもごろにみとる程に、或日相沢は尋ね来て、余がかれに隠したる顛末てんまつを審つばらに知りて、大臣には病の事のみ告げ、よきやうに繕つくろひ置きしなり。余は始めて病びょうし牀しょうに侍するエリスを見て、その変りたる姿に驚きぬ。彼はこの数週の内うちにいたく瘦やせて、血走りし目は窪くぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助にて日々の

生計たつきには窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞え上げし一諾いちだくを知り、
 俄にはかに座より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に僵たふれぬ。相沢は母を呼びて共に扶たすけて床ふせに臥させしに、暫くして醒めしときは、目は直視したるままにて傍かたはらの人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髪をむしり、蒲団を噛かみなどし、また遽にはかに心づきたる様

にて物を探り討めたり。母の取りて与ふるものをばことごと悉ことごとくなげう抛ちしが、机の上なりし襁褓を与へたるとき、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど殆全ほとんどく廃して、その痴ちなること赤児の如くなり。医に見せしに、過劇なる心労にて急に起りし「パラノイア」といふ病なれば、治癒ちゆの見込なしといふ。ダルドルフの癲狂院てんきやういんに入れむとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出いだしては見、見ては歎ききよ歎す。余が病牀をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと

見ゆ。ただをりをり思ひ出したるやうに「薬を、薬を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍かばねを抱きて千行ちすぢの涙を濺そそぎしは幾度ぞ。大臣に随ひて帰東の途に上ぼりしときは、相沢と議はかりてエリスが母に微かすかなる生計たつきを営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺のこしし子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。

嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡のうりに一点の彼を憎むところ今日までも残れりけり。

日本文学電子図書館

阿部一族・舞姫

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館